

出張先のバースデーケーキ

胡坐啓樹

『……』

むなしい涙の捨て場所を

さがしてみたい 遠くで汽笛を聞きながら

何もいいことがなかったこの街で』

十五年前、私はこのアリスの歌を馴染みのスナックに行く度に歌っていた。

二十数年の間、超ワンマン雇用主の秘書として、もう一方で国の委託事業の請負事業者に出向し、マネージメントの一切を任されていた。そしてやっと独立出来た矢先のことだった。元雇用主が請負事業者と裏で手を回し、私に暖簾分けした仕事を潰してしまったのだ。私とその信じ難い事実を知ったのは三ヶ月も後のことだった。

彼は地方の歯科医師会の専務理事になってから、自分が脱税を繰り返していたことを世に知られることが急に怖くなったのだ。

「苦節四半世紀、耐えに耐え仕えてきた結果がこれだったのか……」

私は自分に任された仕事ではインシティブを握っていた。

私がこの裏切り行為を受け入れなかったことで国の委託事業は完全にストップしてしまった。しかし、その後の私の対応は周囲を困惑させ、多くの人たちに迷惑を掛けることになった。私はその後半年の間、仕事にかかわる人間関係の中で一人抵抗を続けた。

その間、当然収入はなく、妻からも罵られ、経済的にも精神的にも耐え難い日々が続いた。

そしてある日、私は悩みぬいた末、この件を公にすることを断念し、元雇用主の裏工作の結果を受け入れざるを得なくなった。私がそれ以上抵抗を続けることが関係者にどれほど迷惑をかけることになるかを考えると、運命として受け入れざるを得なかった。そして、自宅にしまい込んでいた事業の基になる、七百名ほどの申込み名簿を、涙を吞んで実施主体の事業者に渡すことにした。

私の単独の権力への抵抗は、この日をもって終わった。

この失業を契機に人間不信、家庭崩壊、そして借金と私の人生は暗い方向にまっしぐら

に落ちていった。そしてそんな私に妻は更に追い討ちをかけるように激しく罵った。

私は何もかも失い、怒りと失意のうちに日々を送っていた。しかし半年ほど経って何とか職安に通い始め、新聞の求人広告にも目を通すまでになった。

ある日新聞にブックセールスの求人広告を見つけた。応募の条件には「長期出張できる人」とあった。家の中に自分の居場所のない私にとってまさに救いの求人募集であった。

平成十二年の冬、私は中央アルプスと南アルプスに囲まれた南信州に出張していた。宿では毎夕食後ミーティングが開かれ、各人の営業結果を報告させられた。私は結果の出ない日も正直に報告していたが、プレッシャーから、偽りのオーダーをあげてクビになった者たち、そして、知らないうちに宿を引き払う、「夜逃げ」の者たちもいた。

それだけ仕事はきつかった。

しかし、私にとってここには、家にはなかった、自分の「居場所」があった。

二月に入ったある日、同僚からモーニングに誘われた。二人の台湾人ママが共同経営している「S」という名の喫茶・スナックだった。店に通いだして間もなく、私はそのママの一人と親しくなった。そのママの名は「サイファン」、彼女は私のことを「テンツォン」と呼んだ。ママは男性性で器の大きい人だった。私は、役所に提出する書類を書いてやったり、喘息もちの娘を病院に連れて行ったりしていた。

また、しばしばメンバーが揃わないからと、中国式の麻雀に誘われ、朝帰りも続いた。台湾人の女性グループの中でルールも殆んど分からない私に勝てるわけがなかった。案の定負けることが多かったが、負け分はママが持つといつてきかなかった。

仕事を終えても上司と同宿でストレスを溜め込む同僚たちを尻目に、私は、家では満たされなかった日々を取り戻そうとしていたのか、気儘な毎日を送っていた。

ところで、私が入社したこの会社はかなりえげつなかった。社員はみな自腹で宿に泊まらせていたので、毎月の宿泊費は少なくとも十五万円は下らなかった。売れない月は宿代を払うにも持ち出しの状態だった。

ママと知り合って間もなく、彼女の方から、I市駅前のマンションを又貸ししてくれる話があったので、私は喜んで借りることにした。

ところが、部屋に入ると、なんと壁にはヤクザの代紋入りの写真が掛けられていた。

以前、ママから、

「実は、私の旦那はこの地方では有名なヤクザの組長の弟なの。もう離婚を決心したけど、怖くないか？」

と言われたことがあった。そのとき、正直なところ気味が悪かったが、

「俺には関係ないことだ」

と答えると、

「あなた、変な日本人ね」

と言われた。

ちょうどその頃、兄の組長が事件を起こし指名手配中と聞いていたので、いつかマンションに立ち寄るのではないかとヒヤヒヤしていた。でも、私には失うものなど何もなかったから、強くなれたのだろう。

とはいえ、代紋入りの写真が毎晩出迎えてくれるのは決して有難くはなかった。

最初のうちは気になって眠れなかったが、背に腹は代えられなかった。いつの間にか平気になってしまった。

四月に入って間もないある日、ママから声をかけられた。

「テンツオン、今晚お店に寄って」

「うん、寄れたらな」と生返事を返していたが、仕事から戻るとママの言葉を思い出した。

店の中はいつもの様子とは少し違っていた。

照明は暗く、客もいない。

すると、店の奥のほうから囁くような子供たちの歌声が聞こえてきた。

「ハッピーバースデー・ツー・ユー」

「ハッピーバースデー・ツー・ユー」

その時、店の照明がパッと明るくなり、

「オメデトウ、テンツオン！」

「タンジョウビ、オメデトウ！」

私はその時、今日が自分の誕生日であったことに気がついた。

クラッカーがバンバンと打ち鳴らされる中、奥のカーテンがスーッと開かれると、テーブルの上には大きなバースデーケーキが置かれていた。

もう、家に戻るといふ気持ちもなく、死んでしまってもいいと思っていた私だった。
そんな私に、遠く離れた地で、しかも異国の家族に囲まれた温かなハプニング。
私は恥ずかしさも忘れ、止めどなく溢れる涙を拭おうともせず、キャンドルの火を消していた。

その夜、荒んだ私の心の中に、一筋の灯りがともされたように思いながら、久し振りに心地よい眠りについた。そして夢の中で、アリスのナンバーの一節を歌っていた。

『あの人に教えられた 無言のやさしさに

今さらながら涙こぼれて 酔いつぶれたそんな夜

日はまた昇る どんな人の心にも……』